



看護の心をみんなの心に

5月12日は
看護の日

第7回

「忘れられない 看護エピソード」集

2017年
「看護の日・看護週間」

想いをつなぐ看護がある。



公益社団法人 日本看護協会

もくじ

最優秀賞

- 3 忘れられない親子の姿 看護職部門
～血のつながりってなんだろう～

- 4 赤い星 一般部門

内館牧子賞

- 5 闇の中の私 看護職部門

- 6 痛みを共有して下さって 一般部門

優秀賞

- 7 がんサロンのパイオニア 看護職部門

- 8 旅立ちのお手伝い 看護職部門

- 9 どんぐりころころ 看護職部門

- 10 温かい心で寄り添って 一般部門

- 11 「今」を生きる力 一般部門

- 12 心を支える看護 一般部門

入選

- 13 今日は、いい日だ 看護職部門

- 14 たまご 看護職部門

- 15 災い転じて 看護職部門

- 16 だいじょうぶ、だいじょうぶ 看護職部門

- 17 むこう側 看護職部門

- 18 抱きしめられて 一般部門

- 19 彼女との約束 一般部門

- 20 峠を越える応援歌 一般部門

- 21 わたしの道 一般部門

- 22 ありがとう、せつ子さん 一般部門

看護職部門 内館牧子賞 〈闇の中の私〉を映像化



右記QRコードからも
アクセスできます



映像化作品はこちらからご覧になれます。
<http://www.nurse.or.jp/portal/list01.html>

はじめに



5月12日は「看護の日」です。

近代看護を築いたナイチンゲールの誕生日にちなみ1990年に制定されました。それ以来、「看護の心をみんなの心に」をメインテーマに厚生労働省と日本看護協会が中心となり、毎年さまざまな事業を全国各地で行っています。

2017年度は、第7回「忘れられない看護エピソード」を看護職と一般の皆さまから募集。過去最多となる3,578通の応募の中から、特別審査員の内館牧子さん(脚本家)、ゲスト審査員の川島海荷さん(「看護の日」PR大使)らによる、よりすぐりのエピソードを20作品を収録しました。入賞作品のひとつである〈闇の中の私〉を映像化し、5月7日の表彰式で上映しました。

ケガや病気で入院したり、ご家族に付き添ったり。患者さんやご家族にとっても、看護にあたる看護職にとっても、心に残り、ずっと人生を支えてくれるような看護体験があります。

その後の人生を生きていく糧となるような、忘れられない言葉をもらうこともあります。看護は、人生を変えることだってあるのです。

看護にまつわる感動のエピソードが、生きる素晴らしさを思い、明日を生きていく力を生み出すきっかけになれば幸いです。

公益社団法人 日本看護協会



忘れられない親子の姿 血のつながりってなんだろう

〈福岡県〉 瀬上 希代子 せのうえ きよこ 49歳

長くNICU(新生児集中治療室)で看護師長として勤務してきた。その中で、忘れられない「親子の姿」がある。ある日、1人の赤ちゃんが入院してきた。Aちゃんは低体温で入院した。しかし、もう1つの理由は「育児者がいない」というものだった。

周りの赤ちゃんは両親が面会に来ている。看護師たちは、面会のないAちゃんを抱っこしたり、目を合わせて話し掛けながら授乳するなど、できる限りの愛情を注いでいた。

担当看護師Yさんは、Aちゃんの日記をつけていた。毎日少しずつ大きくなっていく体重、増えていくミルクの量をはじめ、看護師がどれだけAちゃんをかわいいと思っているかをしつつ、写真や手・足型を取って、日記に

貼っていた。「大好きだよ」のメッセージと一緒に。

3週間の入院で、Aちゃんは乳児院へと退院し、その後のAちゃんについての情報が病院に入ってくることはなかった。

それから5年後、Aちゃんの里親さんから「担当していた看護師に話を聞きたい」と連絡があった。Yさんは他部署へ異動していたが、連絡をとり、お会いする機会を持った。

特別養子縁組をしてB家の長女となった、5歳の笑顔のかわいいAちゃんは、お母さんと一緒に会いに来てくれた。お母さんはAちゃんが物心つくころには事実を話していたこと、愛情深く育てていること、そして生まれてすぐに入院した病院で看護師たちにと

てもかわいがってもらっていたことを、Yさんの日記を見せて話をした、と教えてくださった。「愛されていた」ということの証となる日記を作ってくださいありがとうございます」とお礼を言っていた。

NICUという環境の中で、時には血のつながりって何だろう、と考えることがある。Aちゃんを取り巻いた色々な形の愛情からは、人と人とのつながりの奥深さと、愛情をもって接することの偉大さが感じられた。

若い看護師であったYさんも、今は一児の母である。とても愛情深い育児をしながら、看護師としてがんばっている。



赤い星

〈兵庫県〉 洲本 美智代 すもと みちよ 39歳

秋も深まり冬の気配が近づく夜のことだった。

「お母さん、僕は星空を見たことがないねん。夜にお出掛けしたことはないやろう? 本物の星空を見たいなあ」そう話す息子には、もう時間がない。

難病で肺を患い、入退院を繰り返して9歳になった。夏の終わりまで、酸素ボンベを乗せた車いすで病院の周りを散歩することができた。しかし、今では外出もままならず、病室の天井と壁を見つめる日々が続いている。外の世界といえば、わずかに見える窓からの景

色とテレビ、そして大好きな図鑑を眺めることだった。「図鑑があれば何でも分かるから」と、いつも枕のそばに置いていた。

少しの時間だけでも星空を見せてやりたいと医師に相談してみたが、容体は安定せず、外出の許可は下りなかった。私は「願いをかなえてやるのができなくて悔しい」と担当の看護師にぼつりと漏らした。

すると次の日、看護師が家庭用の小さなプラネタリウムを持ってきた。手のひらサイズの宇宙の登場に息子はとても喜んだ。夜を待ち、個室の電気を消してスイッチを入れると、天井と壁一面に冬の星空が広がった。図鑑で覚えたオリオン

座を見つけると、「ベテルギウスは一等星で赤い星やで。僕は赤が好きやから、ベテルギウスは僕の星やな。もう寂しくないわ」とうれしそうに笑った。

病室で星空を見た数日後、息子は眠るように逝った。

看護師の仕事といえば点滴の交換や患者の世話をすることだと思っていた。しかし、体に触れるだけではなく、患者と家族の気持ちに寄り添いそつと支えることも看護ではないだろうか。

プラネタリウムのおかげで息子も私も救われた。最期の自由を与えてくれた看護師の優しさに心から感謝している。



闇の中の私

〈京都府〉 小谷 英子 54歳
こたに えいこ

私はスリーケースの中、ふたがゆっくり閉められる。「わああー」。自分の声で目が覚める。あー夢か。ここは病院。

私は、道を横断中、バイクにはねられた。体が一瞬宙に浮き地面にたたきつけられた。肩・肋骨・腰・骨盤・足の骨折でベッドから動けない患者になった。「あの夢は、今の私?」。尿の管を入れオムツをして、1人では寝返りもできない。事故に遭う前は、看護師として働いていた。幾人ものベッド上の患者さんを見てきたが、自分がそうなるとは。

食事、排せつ、体位変換、全て他人の手に委ねないとできない。看護師さんと呼ばないけれど忙しそう。さつきからナースコールが頻回に鳴っている。自分が仕事をしている

時を思い出す。「あーなんでこんなことに」。悲しくてタオルで口を押さえて泣いた。眠れない夜だ。

「おはよう。眠れましたか」。明るい声が病室に入ってきた。看護師長さんだ。私は動かせない体がつらくて眠れないことを訴えた。師長さんは、「ここが痛いでしょ」と私の腰に手を入れてくれた。

（そう、そこ。なんで分かったのか、気持ちがいい）

思わず涙が出てきた。今まで我慢していたものがせきを切って流れ出した。なぜこんな体になってしまったのか、大きな声で泣いた。

師長さんは、私の腰をさすりながらじつと話を聞いてくれた。そして私の興奮が収まった時、こう言った。「元氣な時の自分と比べたらだ

め。事故直後はどうだった? 今日とは昨日と比べてどう? 少しずつ良くなってない? 焦ったらだめ。一歩一歩よ」

確かにそうだ。見方を変えようと不思議と気持ちが楽になる。固まった体がほぐれていく。

あれから3年、看護師として復帰した。家に帰る患者さんの退院支援を行っている。どういう支援をしたら良いか、自分の経験を生かし考えることができる。暗闇の中の私を救ってくれたあの温かな手と、あの言葉で、私はもう一度白衣を着たいと強く願った。正直、前の体のようにはいかない。でも自分に言い聞かせている。「焦らず一歩一歩よ」。



痛みを共有して下さって

〈千葉県〉 宮内 瑞穂 70歳
みやうち みずほ

昭和48年1月24日早朝、一日中苦しんだ陣痛の痛みから、ようやく私は解放された。この世に生まれ出た途端に「おぎやあ、おぎやあ」と激しく泣きじゃくる長男の産声。真っ赤な顔をして、それはまさにお猿さんにそっくりだった。

助産師さんが産湯を使った後に、白いベビー服を着せたわが息子を抱っこした。寝ている私の顔のすぐそばに、長男を近づけてきて「おめでとう! お母さんになりましたね。本当に良くがんばりました。ほんとにも元氣な赤ちゃんですよ」。なんと優しい温かい言葉。母になったという感動がジーンと私を包み込む。

「一晩中見守ってくださいって、ありがとうございました」。顔中涙でぐしょぐしょになりながら、手渡されたネームバンドを息子のその小さな足首に取り付けた。

その時である。助産師さんの腕の血管が、一部ドス黒く浮き上がっているのに、私はハッとした。「ひょっとして、それは……」

痛々しい助産師さんの前腕部分。波のように次々と襲ってくる陣痛の鋭い痛みには耐えかねて、そばで励ましてくださっていた彼女の腕を、思わず私は思いつき強く握りしめてしまっていた。ベッドの柵があったにもかかわらず、柵を握らずにひたすら助産師さんの腕を、握りこんで離さなかった。

「ごめんなさい。痛かったでしょう」。心から謝った。

「いいんですよ。私もお母さんと一緒に、赤ちゃんが生まれてくるのを、腕の痛みには耐えながら、共にがんばれたんですもの」

心温まる優しい言葉を返してくださった。

長男が誕生したあの時から、半世紀に近い時が流れた。その長男に女の子ができ、私は祖母になった。かわいい孫を見ていると、あの出産時の、陣痛の痛みを共有してくださった、助産師さんをおもひ起こす。そっと机の引き出しの奥から、当時の母子手帳を取り出して見た。少々紙が変色してはいるが、助産師さんのサインが輝いて見えた。



がんサロンのパイオニア

〈石川県〉 北野 真実 きたの まみ 55歳

「わしは子どもの時から、5段階の通知簿で、2か3しかもらったことなかったのに、病院に来て初めて「ステージ4」という数字をもらった。ついでに、先生は『あと6カ月です』と母ちゃんに言うたらしいけど、わしは先生の期待に沿えなくて申し訳ない。3年目を迎えてしても先生に謝っとる。『裏切ってすんません』って」と笑う男性のYさん、63歳。院内のがんサロンで、とても明るく豪快に話された。

話すYさん。ちよつとハスキーな声で穏やかな口調は優しい。この日之境に、Yさんと若いママであるSさんの信頼関係が育まれていった。

壮絶な治療の末、突然の肺炎を併発して、昨年3月にYさんは永眠された。がんサロンでどれだけの方々が、Yさんに励まされたことだろう。「こういう場所は、絶対大切や。病室でカーテンを閉め切つて、おとなしくしとるよりも、ここに來ていろんな人と話したり、笑ったりするほうが、絶対元氣になれる。もつともつと、みんなこういう場所に来るべきや」といつもサロンの人々を勇気づけていた。テレビ局から取材の依頼があつた時も「いわゆる個人情報というものを伏せる必要は全くない」と言い、堂々と取材を受け、

全国に放映された。Yさんの家は、石川県の能登半島。病院のある場所から車で約3時間かかる。お葬式の日、私はSさん夫妻とテレビ局のディレクターに出会つた。Yさんの奥さまにお香典を渡そうとしたSさんの手を握り、奥さまはしみじみおつしやつた。「これを受け取つたら、お父さんに叱られるわ。『わしの大事な仲間や。いらん』って」。Sさんは、ボロボロと泣いた。

今、がんサロンにYさんの写真を飾っている。Yさんは、いつも見守つてくださっている。

それを聞いた33歳のSさんの暗い表情が、パツと明るくなった。抗がん剤の治療中で、気持ちがとても沈んでいる時だった。「手術できるだけいいってことやぞ！ 通知簿4になったら、そう簡単に医者にはメスを持たんくなるんやぞ」とSさんに



旅立ちのお手伝い

〈東京都〉 小崎 綾子 こさき あやこ 41歳

「娘の結婚式でバージンロードと一緒に歩きたい。それまではがんばりたいんだ」

た。「父は結婚式には出席できないでしょう。花嫁姿を見ることが、最後の親孝行だと思ひます」と話し、Aさんの外出を希望した。しかし、Aさんは「家族の写真是結婚式で撮ればいいだろう。写真のために、出掛ける必要はない」と話した。

Aさんは2カ月後に控えた長女の結婚式について看護師に話した。肺の病気で治療をしていたが、病状は増悪しており、2カ月先どころか1カ月後にも分からない状態であった。「バージンロードと一緒に歩いて果立つてを見送ることが、父親としての最後の仕事だと思ひうんだ。それまでがんばらないとね」とAさんは話した。

Aさんの呼吸状態を考えると外出することは難しいが、花嫁姿を見たいという長女の思ひをかなえるために外出できるよう医師と方法を考え、Aさんと長女へ話した。しかし、Aさんは「写真を撮ることは意味がない」と拒否した。

医師より、Aさん家族へ残された時間が短いという説明があつた翌日、長女より結婚式の前撮り写真を撮影するためにAさんを外出させたいという相談があつ

私はAさんが「バージンロードと一緒に歩くのが父親の仕事」と話していたことを思い出した。そこで、長女とAさんに「病棟で結婚式を行いませんか？

車いすでなら娘さんと一緒に歩けますよ」と提案した。Aさんは「できるかい？ 手伝ってくれるかい？」と笑顔を見せた。

2週間後に病棟で家族だけの結婚式を行うこととなった。看護師たちで準備を行い、Aさんは10分程度車いすに乗れるように理学療法士と練習を行った。当日、廊下をバージンロードに見立て、モーニングを着て車いすに乗り、ウェディングドレスを着た長女と手をつないで廊下を進むAさんは笑顔でいっぱいだった。新婦の父からのあいさつで「父親としての役目は果たせました。皆さん手伝ってくれてありがとう」と涙を見せた。

数日後、Aさんは天へ旅立つた。



どんぐりころころ

〈新潟県〉

澁谷 しぶや

奈緒美 なおみ

34歳

小児科に勤めていたころ、病室には毎日童謡のメロディーが流れていた。完全看護のため、日中しかわが子と一緒に過ごすことができない家族は、面会終了時間までをここで過ごす。

新人のころ、私が初めて受け持たせていただいたT君は、脳性まひの10カ月児だった。T君は、呼吸器をつけていて目を開けることも手を握ることもできない。呼吸が安定せず、自宅に退院できるめどは立っていないかった。

音楽教員のお母さんは毎日面会に來られ、ふっくらした手で優しくT君をなでて、耳元で童謡を口ずさんでいた。口のチューブから入るミルクの量を記録し、今日の体重を看護師に尋ねるのが日課だった。

ある時お母さんは、病室に流れる「どんぐりころころ」をT君の耳元で口ずさみながら、「ねえ、看護師さん。どんぐりはお山に帰れたのかしら。Tはまだ帰れないけれど、どんぐりは帰れたのかしら」と言われた。お母さんの頬に涙が伝う。

どう返事をすればいいのだろうと考えるが、笑顔で話を聴くことしかできない。いや、笑顔どころか、涙が出てくる。「涙は止まれ、止まれ！」と思うが、さらにあふれてきて止まらない。

T君が生まれてから今日まで、お母さんはどんな思いで歌い続けてきたのだろう。厳しい現実を受け止めながらもわずかな期待を持って過ごす中で、抱えきれない思いが涙にあふれてきたのだ。

狭い病室におえつが響く。数分間、2人で周りを気にせずに泣いた。涙を拭いて、ふとT君を見たら、トローンと目じりが下がり、笑っているように見えた。

お母さんが力強く言った。「どんぐりはお家に帰れたよ、僕もがんばるね」って言っているのね。T、絶対にお家に帰ろうね」

お母さんは答えがほしかったのではなく、精いっぱい苦しい今を、ただ聴いてほしかったのだと思った。1年後、T君は呼吸器をつけて自宅に退院することができた。何もできないと思っていた新人の時に、話を聴くことの大切さに気付けたことが今、精神科で働く私の宝物である。



温かい心で寄り添って

〈埼玉県〉

中田 なかだ

真由美 まゆみ

53歳

「あれ？ 変だな、足に力が入らないよ、ママ」

そう言ったかと思うと、ヘナヘナと私にもたれかかってしまった娘。娘をよく見ると左手足がしびれて力が入らない。左顔面も神経まひを起している。これはただ事ではない。急いで病院へ連れて行くとすぐに頭のレントゲンを撮った。結果は脳内出血を発症していた。

娘はまだ10歳、詳しい検査が必要というところでそのまま集中治療室へ。CT、MRI検査で異常な血管像が確認され、脳動静脈奇形と診断された。先天性疾患とのことだった。

昨日まで元気に友達と

遊んでいたわが子が突然、左半身まひだなんて……。ドクターからの説明を受けた後、頭の中が真っ白になり目の前が真っ暗になった。

どうしたらいいか、どうなるのか不安ばかりで、そのときの私は全身の震えが止まらなかった。そして娘のいる集中治療室へ向かう途中、涙が止まらなかった。

1人の看護師が私を支えながら付いて来てくれた。彼女は優しく「突然のことで大変だとは思いますが、お母さんががんばりましょう。一番つらいのは娘さんですからね。私たちにできることは何でもしますので遠慮なく何でもおっしゃってください」と言ってくれました。

私は彼女に抱きついて大泣きし

た。そんな私をしつかり抱き締めてくれた彼女の温もりは、今でも忘れない。

毎日娘を見舞う私の様子を見て「お母さん、ご飯食べてますか？」

お母さんが倒れたらダメですよ。今すぐ売店で何か買って来て食べなさい」と私を叱ってくれた彼女。食事なんて喉を通らない、あまり眠れない、そんな私を見透かしていたようだ。「大丈夫、この子はきっと強い子になりますよ」。そう言っ毎日献身的に看てくれた。

その後、血管内治療と集中放射線治療の組み合わせによる治療で娘は完治した。今でも感謝の気持ちでいっぱいだ。



「今」を生きる力

〈京都府〉

まつおか

しげなが

67歳

1年前、66歳で胃がんを発症した。医師からがんの宣告を受けたときは、もう家族とも未来を共にできなくなるのかと、不安のどん底に突き落とされた。さらに、胃の摘出後は転移の恐れと、仕事にはもはや復帰できないという絶望感とが入り混じり、気力も次第に失われていった。

そんなとき、病室担当の1人として看護学校に通うK君が現れた。彼は看護実習生だと言って、私の下着の着替えや面倒な洗髪など看護師たちを助け、献身的に尽くしてくれた。彼は九州から京都府の学校に入り、3カ月後の看護師国家試験に向け、実習をしながら猛勉強をしているのだった。「故郷で待つ母を早く安心させたい」と言い、徹夜の勉強もしていた。どんなに疲れていても、笑顔で私

を励ましてくれた。
あるとき彼は、私の着替えを手伝いながら「松岡さんは退院したら仕事に戻られるのですね」と聞いてきた。

「K君、私はもう戻れないよ」と力なく言った。実は、私は地方議員で政治家のはしくれだった。「政治家は病気をしたらおしまい」だといわれる。政治生命はがんの発病とともに終わったの思いから、退院後すぐに議員を辞職しようと考えていた。

次の日、K君が私のベッドにやって来て「松岡さんが社会復帰されるのが、私たち看護従事者にも力を与えるのです」と言った。私は目をぶって聞いていた。看護師という厳しい世界に飛び込んでいくK君。目標を持ち純粋な心でひたすら人に尽

くすその姿が、自暴自棄になっていた私の心を動かした。

退院の日、お互いに目を見て握手をした。その後、私は1カ月だけ自宅で養生し、議員活動に復帰した。命の有限を知った手術後は、時間の質が違って見える。今日が最後の日になってもいいように、私は「今」を懸命に生きている。

ありがとうK君……。どこかの病院で、彼は今日も病む人のために奮闘していることだろう。



心を支える看護

〈愛媛県〉

おおの

ともこ

59歳

す日々だった。

2016年初夏、肝機能の数値が悪化し抗がん剤治療ができなくなった夫に、医師は「入院し病院でのおみとりになりますね」と告げた。夫は入院を拒否。医師の言葉から「今入院すれば二度と自宅には戻れない」と思ったのかもしれない。私もその日、夫を最後まで在宅で支えようと決心した。

しかし、まるで坂を転がり落ちるように悪化する夫の病状。看護の専門知識のない私にとって、病状の進んだ彼が自宅で、少しでも痛みや苦しみをなく過ごすにはどうするべきか、入院した方が楽なのではないかと、大きな不安を抱えて過ご

そんな時、病院内に「がん相談支援センター」という相談機関があることを知った私は電話をかけた。電話に出たのは、担当看護師のMさん。私の話を黙って聞き「つらかったですね、不安があればいつでも相談してください」と張りつめていた私の心をMさんのその言葉がほぐし、

電話口で私は涙を流していた。そして通院日、腹水のため15キロも体重が増えた夫が、外来待合室で座って待つのはつらいだろうと、やはり支援センターの看護師Sさんががん化学療法室の空きベッドを用意し一緒に付き添ってくれ、高カロリー飲料や訪問看護について教えてくれた。そうしてお願いした訪問看護師Kさん

は、深夜、呼吸が荒くなった夫のためにすぐ駆け付けてくれた。

こうして心の支えを得た私たち2人は、手を握り合い、たくさん語り合い、時には抱き合い、夫が逝ってしまう前日まで、住み慣れたわが家で彼の希望通りの「日常」を過ごすことができた。

医療とは、看護とは何だろう。入院して、医師・看護師がそばにいるから安心なのではない。「心に寄り添ってくれる人がいる」。それが患者とその家族にとってどれだけ明るい光となるか……。今苦しむ悩んでいる患者と家族の1人でも多くの方が「心の支え」となる看護師と巡り会ってほしいと願っています。



今日は、いい日だ

〈愛知県〉

あさの
浅野

はるか
春香 30歳

94歳のMさんという患者さんが入院していました。その方は、医師から余命数週間と言われており、自宅へ帰るのは難しい状態でした。ある日、Mさんからナースコールがあり、部屋に行くところ「もう死にたい！ 家に帰れないなら、首をつって死ぬわ！」と大声を上げていました。部屋には、3人のお子さまがみえ、皆さん、つらそうな表情をされていました。私はMさんの手を握り、思いを聞きました。しばらく、お話を聞いた後、私はご家族に「皆さんで、Mさんの手と足を温かいお湯で洗いましょようか。きつと気持ちが良いですよ」と提案しました。それを聞いたご家族は「やりたい！」と笑顔で腕まくりをされました。

そこから、とても温かい穏やかな

時間が始まりました。次男さんは、ニコニコしながら、Mさんの足を丁寧に洗っています。「熱い？ 母さん、こんなにきれいで長い指をしていたんだね」と言いました。長女さんは、手を洗いながら、「本当にきれいな指」と。長男さんは「俺はいいよ」と少し照れた様子で眺めています。60代の息子さん、娘さんが、自分たちを産み、育ててくれた大切なお母さんの手と足を優しく見つめながら、感謝を込めて、丁寧に洗います。

すると、さっきまで眉間にしわを寄せ「死にたい」と大声を上げていたMさんの顔がだんだんと緩んでいきました。そしてMさんは、こう言ったのです。

「今日は、いい日だ」

私が働く大学病院では、病や死と

いった悲しい出来事は避けられませんが、でも、それらをただ「悲しいこと」と言い、やり過ごすのではなく、どうしたら、患者さんやご家族が少しでも楽になれるのかを、考えて考えて考える。それが、私たち看護師の大切な仕事です。

Mさんが「死にたいと思った日」。それは、息子さん、娘さんの力で、「いい日」に変わりました。この時、私は看護師をしていて本当に良かったと思います。私にとっても、忘れられない「いい日」になりました。



たまご

〈大阪府〉

くろいわ
黒岩

えみ
絵美 44歳

看護師になって初めての年、私はある患者を受け持った。患者はいかにも頑固親父風の人で、病名は胆管がん。看護師に大声で怒鳴ることもよくある。しかし、がんの進行が進み、胆汁を排せつするための管や点滴のチューブなどが体に数本入っており、心なしか表情が沈んでいた。痛みや倦怠感が強いいため、患者の負担を考え、日ごろのケアは手際良くするよう先輩看護師より厳しく指導を受けていた。

ある日、チューブの入れ替えのため、全身の清拭を行うことになった。前日、念入りに検査データの情報収集を行い、疾患について調べ、看護技

術の本を読みあさり、患者のケアに對する予習を行った。今思えば、それは焦りや不安を解消するために、とにかく勉強して臨めば大丈夫という気持ちを落ち着けるための儀式で、手順や段取りなど頭に入っていなかったのだと思う。気が付けば朝方になっており、出勤時間が近くなっていたため慌てて家を出た。

いよいよ、準備をして頑固親父の所へ出陣し、あいさつをした。おそらく緊張で私の顔はこわばっていただろう。「よろしく」と一言。

熱いタオルを準備し、体を拭きながら湯気越しに患者の顔を見ると、私は急に血の気が引いたような感じになり、不覚にもその場で倒れてしまった。

気が付くとソファーにもたれ掛かっていた。「大丈夫か、ねえちゃん。部屋に来た時から顔色悪かったし、ちゃんとご飯食べとるんか？ 食べな体力つかんよ。わしは『もって1年生きられへん』と言われてるけど、これ食べるたびに寿命が延びると思って毎日食べてるもんがある。これ食べて元気になってや」と、冷蔵庫から木箱に入った烏骨鶏のたまごを出してきて手に握らせてくれた。涙が出ないようこらえ、家で泣きながらご飯にかけて食べた。たまごを見るたびに思い出す。相手を思いやる気持ち、自分の大切な命の片りんをも分けるような優しさは、私の看護の原点だ。



災い転じて

〈新潟県〉

佐藤 さとう

量子 かづこ
57歳

私は、半年前に副看護部長として今の病院に入職した。小さな田舎の病院で22年間過ごしてきた私にとって、どこか居場所がない日々を過ごしていた。

あの日も慌しい外来で、病院長が突然「佐藤君、さっきの余震で君のいた〇〇病院が大変だ。入院患者は全員避難で、当院は23人を受け入れることにしたからすぐ準備を頼むよ。君の家は大丈夫か？」

3日前の10月23日、中越地震で私の町もダメージを受けてはいたが、今朝も以前の職場であった病院の前を通り、寸断された通勤路を迂回して出勤して来たばかりだった。1時間ほど前に少し大きな揺れを感じたが、毎日余震続きで気にも留めていなかった。

急いで講堂にベッドを準備して患者さまの到着を待っていると、県内外から応援に来た救急車が続々と到着した。最初に搬送された見覚えのある老女は、毛布に包まり震えている。「△△さん、怖かったね。もう大丈夫よ。お部屋を用意しておいたからゆっくり休んで」。手を握ると「佐藤さんだね。先に来て待っていてくれたんだね。ありがと、ありがと」と、泣きながら手を握り返してくれた。

でしよう。気分悪くないかしら。血糖値を調べてすぐ食べられるものを用意しますね」

そこに副院長が回診に来て「佐藤君、何でカルテもないのにそんなことが分かるんだね。不思議そうに私の顔をのぞき込んで尋ねた。

「この患者さまたちは、半年前まで私が勤務していた病院の患者さまです。〇〇病院のナースはこれくらいみんな分かりますよ」

すると副院長は「あんたたちはいい看護師さんに看てもらって幸せだね。今日は、私が診させてもらいますよ」

この日以来、この病院に小さな居場所ができたような気がした。



だいじょうぶ、だいじょうぶ

〈北海道〉

岡田 おかだ

美優 みゆ
23歳

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と、患者さんに言われたことがあります。

看護師1年目の私は患者さんと接するとき、自分を落ち着かせるために確認したことに対し「よし」と声を出していました。患者さんにとって、確認しては「よし」と言われ、あまり良い気持ちはしないかもしれないが、焦る自分を落ち着かせるために、つい口に出してしまっていました。

その患者さんは、私が1年目であり、気持ちを落ち着かせるために「よし！」と言っていることを察してくれ、だいじょうぶ、だいじょうぶ。焦らなくていいよ。私は、ただベッドにいただけだから仕事して」と言ってくれました。私はその言葉にとっても救われました

が、患者さんに焦りを見せてしまったことを申し訳なく感じました。

「そんな優しい言葉を掛けていただき、ありがと、ございます。でも、お気を遣わせてしまい、すみません」と伝えると、「だいじょうぶって言われると、本当にだいじょうぶな気がしてくるんだよ。『だいじょうぶ、だいじょうぶ』っていう絵本があつて、その中にも、だいじょうぶって言われると本当に何でもできる気がしてくるし、実際に何でもできる——って書いてあったよ。絵本では、じいちゃんが孫に『だいじょうぶ』と言っていたら、何でも本当にだいじょうぶになって、孫はその言葉のおかげで成長していくんだ。大きくなったある日、じいちゃんが病気になるから孫がじいちゃんに『だいじょうぶ、だいじょうぶ』って伝えるに行くんだ

よ」と話してくれました。

私はその日の仕事終わりに、その絵本を本屋さんに見に行きました。その数日後、患者さんは亡くなる前日、私は患者さんに「だいじょうぶ、だいじょうぶですよ」と伝えると、小さな声で「ありがと」と言ってくれました。

私は看護師2年目になりました。今では「よし！」の代わりに心の中で「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と心を落ち着かせるようにしています。すてきな言葉を掛けてくれた患者さんに感謝の気持ちを忘れずに、自分、そして患者さんを安心させるために「だいじょうぶ」と心の中で思ったり、あるいは患者さんに伝え、今日も仕事をがんばっています。



むこう側

〈鳥取県〉

なかやま

早織 さおり

32歳

早期がんの多くは、抗がん剤の治療をすれば治る。でも10代の女の子にとっては「髪の毛がなくなるなんて死んでも嫌」な場合もある。涙ながらの家族の説得で治療を決めたものの、気持ちがささくれ立った彼女には、周り全てが敵に見えていたことだろう。病室内で暴れ叫ぶ彼女が、看護師1年目の私には怖かった。

私が彼女の受持ちだったある日、検温中に「いつになったら毛が生えてくる？」と聞かれた。彼女はウィッグを着けていた。下手なことを言うてはいけない。何か質問されたら「医師から聞いている通りです」と言うことになっていた。私はそのせりふを口にした。

「いや、医師とかいいから。今までの経験上でいいから教えて」

まだ1年目だからこんな経験初めてだ。どうしよう。真つすぐな瞳で見つめられた私は、自信のなさを見透かされたようで耐えきれず、思わず目をそらした。その時である。

「今、笑っただろう！ 私の髪がないのが、そんなにかしいか！」

彼女は怒声と共に私に詰め寄り、後ずさる私のお腹に向けて力いっぱい500mlのペットボトルを投げつけた。先輩によりその場は収められたが、人からあんなに「怒り」をぶつけられたことは初めてで、お腹の痛みよりも、真つすぐな瞳をかわすことしかできなかった自分が情けなくて、涙があふれてきた。

もう彼女と関わりたくなかったが、先輩からプロとして患者と向き合うよう言われ、当たり障りない関

わりを続けた。仕事に行くのが苦痛だった。

「ペットボトル投げてごめんね」

退院時、ぶつさらばうに彼女にそう言われた。あれから1カ月半が経過していた。きつと、ずっと気にしていて、最後だからとよそを向きながら口にしてくれた彼女のその言葉に、私は胸がいっぱいになった。

私こそ、きちんと向き合えなくてごめんなさい。あなたのおかげで、逃げない自分でありたいと強く思えた。ヒリヒリ痛んでいたはずのお腹が、今度は何だかむず痒かった。「働くことのむこう側」が、少しだけ見えた気がした。



抱きしめられて

〈埼玉県〉

にいやま

新山 恵 めぐみ

41歳

2012年、40歳目前で待望の2人目を授かりました。ピクピクと元気に動く小さな心臓をエコーで確認し、大喜びで区役所へ母子手帳を受け取りに行った数日後、突然の出血があり、病院に駆け込むと、既に赤ちゃんの心臓は止まっていました。稽留流産という診断で、約半月後に赤ちゃんを取り出す子宮内容除去手術が決まりました。

手術当日の朝、担当の看護師さんが初めて私の病室を訪れた時、白衣の胸元には、カタカナで書かれたネームバッジが付いていました。日本人ではない看護師さんに、ちょっとだけ残念な気持ちになりました。

その看護師さんは、少し違和感のある日本語で「大丈夫ですか？ 手術は心配いらないよ」と、何度も病室へ来てくれました。そして何度目かの何気ない会話の中で、ふと「泣いてもいいんだよ」と、私に言ったのです。とても驚きました。でも、次の瞬間、自分でもなぜだか分からなけれど、とめどなく涙があふれてきたのです。

「今までつらかったね、赤ちゃんが死んじゃったのはママのせいではないんだよ」と、何度も何度も優しく私に語り掛け、抱き締めてくれました。

そうだ、私は誰にも本心を語れず、1人心を閉ざしていたのかもしれない。「流産は仕方ないこと」と

頭では分かっているけど、もしかしたら、赤ちゃんの心臓がまた動き出すかもしれないと、手術直前まで諦められずにいた。できることなら、私がおばあちゃんになって死んで骨になるまで、ずっとお腹の中に置いてあげたかった。「元気に産んであげられなくてごめんなさい」と、ずっと思っていた。看護師さんは、手術前、氣丈に振る舞うそんな私の心に氣付き、寄り添ってくれたのです。

手術から2年後、幸運にも妊娠、出産しました。赤ちゃんを失った悲しみを忘れることはできませんが、あの日、大泣きして看護師さんに優しく抱き締められたから、私はその後、前を向き、再び母になることができました。



彼女との約束

〈宮崎県〉 黒木 新香 20歳

「がんばった」。高校2年生の夏、親友はそう言った。いつも笑顔で明るく太陽みたいな彼女は、いつも通り笑顔だった。

骨肉腫。骨にできる悪性腫瘍で、彼女の左膝関節にできていた。運動が得意で中学ではソフトボール、高校では幼少の時から続けていた書道部に入り「将来の夢に一步近づけた」と喜んでた。

そんな彼女に医師は宣告した。「走ること、膝を曲げて座ることができなくなります」

書道の席上揮毫大会で個人、団体共に優勝を目指していた彼女にとって、膝を曲げて座ることができないことは、夢を諦めると言われるのと同じであった。

手術は成功し、幸い転移もしてお

らず、化学療法が始まった。10キロ以上痩せて、誰だか分からないくらいやつれていった。

それでも「新香、来てくれてありがとう」と常に笑顔だった。そんな彼女がある日、「みんなと一緒に卒業したかった。何で私がんにならないうけないの」と初めて弱音と涙を流した。私は、そんな彼女を前に何も返すことができなかった。抗がん剤で苦しんでいる彼女に「がんばれ」のひと言も掛けることができなかった。

彼女が入院している病院には、彼女と同じ、がんで苦しんでいる小さな子どもばかり。さまざまな疼痛に苦しんでいた。

彼女に「新香、お願いがあるの」と言われ、「なに？」と聞くと「がんを治してとは言えないけど、あなたがい

るだけで周りの人が笑顔になれて、痛みやつらさを緩和できる看護師になって」と言われた。

私は彼女と約束をした。絶対、看護師になって、苦痛症状の緩和を行うことができる緩和ケア認定看護師になることを。あの時の彼女の笑顔の裏のつらさに気付いてあげることが、できる看護師になることを。



峠を越える応援歌

〈栃木県〉 多田 一雄 64歳

「気管支炎を起こしていますね。痰が吐き出せばいいけど、喉に詰まり窒息死すること考えられます」

自宅療養を続ける92歳の母が、いよいよその時を迎えるのかと思えた。

「家族だけでは不安でしょう。訪問看護の回数を増やしましょう」

医師のその言葉に応じ、翌日にさっそく看護師さんが来てくれた。母を横にして、背中をさすったりこ

すったり。気管の奥にある粘っこい痰が出せるかどうか勝負だという。薬の効果も期待してはいるが、体の大きい母を献身的に処置する看護師さんが偉大に見えた。

母が突然せき込み、「苦しい苦しい」とかすれ声で訴えた。

看護師さんは慌てず体を起こして、せきをさせた。すると大きな痰の塊が続けざまに出てきた。

「出てきた。いいいいいよ。もう少しだよ」

時に背中をさすりながら、言葉を掛けて励ましている。母もその期待に応えるかのように続けてせきをしながら痰を吐き出した。

「苦しかったね。たくさん出たよ」その言葉が聞き取れたかのように、息をハアハアさせながら母はうなずいていた。

2日後、「大丈夫ですかあ」と声を掛けながら母の胸に聴診器を当てていた。

「通りが良くなっているよ。すごい！ がんばった。良かった良かった」母に何度も語り掛けながら、母の好きな「富士山」を歌った。

「春の花見を楽しみに生きようね」「春になったら、秋の紅葉を楽しみにね」

母も、笑いながら応えた。「それじゃあ、ずっと死ねないがね」

まだか細い声だが、2人で笑った声は、病の峠を乗り越えた安堵感に包まれていた。家族の思いを超えるかのように母に寄り添う看護師さん。この人生の終焉の出会いに、きっと母は感謝していると、思えてならない。



わたしの道

〈神奈川県〉

横濱

華子

20歳

看護学生2年生。私は、うつ状態になってしまった。看護師になりたい気持ちはずっと変わらず、憧れを持ち続けているはずなのに……。自分でも分からなかった。元々、人の気持ちにのまれやすく、実習はつまらなかった。認知症の方の「帰りたい」という思いを聞いては苦しくなった。そして、何もできない自分に嫌気が差した。

ご飯が食べられなくなり、ぼーっとしてしまうことが増えた。このままではいけないと思った。そして、意を決して精神科を受診した。いろいろな人に話を聞いてもらい、私はずっと泣いていた。医師は私にこう言った。

「あなたのような人は、こういう世界、これからもずっとつらいと思う

ているよ。1人で抱え込んで、泣ける場所がなかったんだよね。今日からは、私の前でも泣けるね」と言ってくれた。

私は、苦しい時に、温かい言葉や態度で見守ってくれる人の存在の大きさを思い知った。そして、自分も人に「こういう看護がしたい」と思った。

いろいろなことから立ち止まってしまふことや、つらくて、つらくて、泣いてしまうこともあるけれど、その分、いろいろな人に救ってもらった。私は、この経験から、自分のやりたいことが見えた。

少しでも、つらくて苦しんでいる人を笑顔にできますように。



ありがとう、せつ子さん

〈栃木県〉

加藤

慶子

58歳

と、言われました。

私は号泣してしまいました。初めて授かった赤ちゃんなので、どうしても産みたいと思っていたからです。私は悲しくなって、ただただ泣いてばかりの日々を暮らしていました。

掻爬手術の日程が言いわたされ、私は祈るよりほかになすすべがありませんでした。

手術日の朝、一睡もせずに、祈っていた私の姿を見て、せつ子さんが先生に掛け合ってくださいました。

「せめて、もう1日だけ、待ってあげてください。患者さんが納得する時間を与えてあげてください」

先生は待ってくださいました。すると、どうでしょう。その晩に、出血が

ピタリと止まりました。翌日の超音波検査では、心臓が動いていることが確認されました。まさに奇跡です。

やがて、私は元気な女の児を無事出産することができました。せつ子さんは命の恩人です。今では病院は取り壊され、全ては思い出の中の出来事になってしまいましたが、感謝の気持ちは今もなお私の心に宿っています。

この時産まれた娘は、小学生2人のお母さんとなり、今も元気で幸せに暮らしております。

「せつ子さん、ありがとう」

34年前の話です。私は第一子を妊

娠中、切迫流産の恐れがあり、約2カ月間、産婦人科病院に入院しました。そこで担当の看護婦さん、せつ子さんに会いました。私は絶対安静という状況で、せつ子さんは、毎日、私の体を拭いてくれたり、ベッドの上で寝たままの私の髪を洗ってくれたりしました。不安な心でふさぎ込みがちだった私のために元氣の出るような本をプレゼントするなど、それはそれは、献身的な看護をしてくださいました。それでも病状は好転することはない、お医者さまから、「今回は、諦めましょう。次に期待ですね」



看護の心をみんなの心に

5月12日は
看護の日

www.nurse.or.jp

【主催】厚生労働省／日本看護協会

【後援】文部科学省／日本医師会／日本歯科医師会／日本薬剤師会／全国社会福祉協議会

【協賛】日本病院会／全日本病院協会／日本医療法人協会／日本精神科病院協会／全国自治体病院協議会／
日本助産師会／日本精神科看護協会／日本訪問看護財団／全国訪問看護事業協会／
テルモ(株)／東洋羽毛工業(株)／ナガイレーベン(株)／パラマウントベッドホールディングス(株)／
ワタキューセイモア(株)